

明治42年、豊岡市の堀川橋周辺の様子。
 左手に帆掛け船、右手には昔の小田井神社が見える。
 写真提供：豊岡市史料整理室



大正末期の豊岡市青田いと(現在の市民会館あたり)。
 現在は国道の敷設によって姿を消した。
 写真提供：豊岡市史料整理室



今でもしつかりと残る船着き場の階段、
 かつて川は人々のくらしを支える重要な交通だった。

円山川・水運今昔物語

今のように陸上交通が発達するまで、川は人を運び、荷を運び、地域の産業とくらしを支える大きな役割を果たしていました。但馬最大の川、円山川もその例外ではありません。

縄文・弥生時代には、丸太をくりぬいた「くり舟」丸木舟が使われていたよつです。豊岡の入り江では浜辺の村との行き交いや、魚や貝の漁に使用されていたと考えられています。

律令制下に国府が現在の日高町に置かれたのも、年貢運送の水運の便を無視して考えることができません。

室町〜戦国期には、大名の武器、兵糧を輸送する組織化された但馬の水軍船団があつたと考えられています。但馬の守護であつた山名政豊が、領国の因幡の争乱を鎮圧しに行く際にも、水軍が使われました。但馬へ凱旋する様子が描かれた詩に、黄色や緑の軍旗を揚げた軍船をみるのができます。

江戸時代に入ると、円山川の水運

は全盛期を迎えます。出石藩の江原、青田、岩中(現日高町)、奇高(現養父市八鹿町)、豊岡藩の小田井、京口などは、円山川屈指の船着き場として賑わいをみせました。農家にとって、舟は大事な財産であり、米や野菜などを町に運び、町からは下肥(しもこ)を持ち運びました。米を十石から三十石積める舟が頻りに円山川を往来していたそうです。

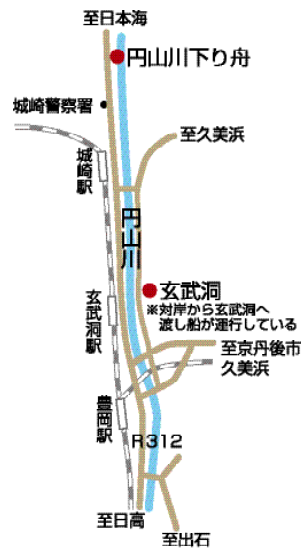
さらに、円山川は北前船の近回り航路としても利用されてきました。享保5年(1720)、大坂商人8人が豊岡市津居山港から播州市川の河口・妻殿(現姫路市)までの通い舟近廻り通船を、養父郡川筋の村々に願ひ出たといつ記録が残っています。日本海を西へ下って大坂へ向かう北前船の積荷を、津居山で小型船に積み替えて円山川をさかのぼる。そして、牛に載せて生野峠を越え、次は市川水系をまた船で下って妻鹿港へ近回りするといつ計画です。

これにより距離と経費が短縮されましたが、長続きはしなかつたよつです。また、城崎温泉の湯治客の交通手段としても、舟が活躍しました。この頃から、いろいろな国、年齢の人々が城崎温泉へ病氣治療に訪れていたそうです。

明治中期には石油発動機船(通称ポンポン船)が登場し、いちやく交通機関の花形になります。明治42年に鉄道が城崎まで開通、そして、自動車の時代になると、船運はその役割を静かに終えました。

現在は観光用の屋形舟と玄武洞への渡し舟のみとなりましたが、今でも円山川には渡し場の階段が残されており、当時の様子を偲ぶことができます。人々のくらしと円山川を結びたいものです。

協力：豊岡市史料整理室
 国土交通省豊岡河川国道事務所
 参考資料：『円山川あれこれ』



東京海上日動火災保険
 東京海上日動あんしん生命保険

TOKIOMARINE
 NICHIDO

MILLEA GROUP

あなたの保険選びをお手伝い

損害保険、生命保険に関するご相談は、
 私どもにご連絡ください。

LINKS(リンクス) 代表 瀬崎 久男 TEL.0796-26-1117
 スーパーフラット 代表 中村 和彦 TEL.0772-83-3090
 東海保険岡田事務所 代表 岡田 郁則 TEL.0772-85-0162

但馬街道



若杉峠

わかすとうげ

【養父市大屋町若杉～波賀町道谷】

古来の伝説が残る
但馬と播磨を結ぶ若杉峠。
人々のくらしを支える
重要な生活の道であった。



養父市大屋町若杉地区を望む



四方を山に
囲まれた養父
市大屋町は峠
の町といって
も過言ではな
く、たくさん
の峠に囲まれ

宅)から越してきたので、越部の名前
が付いたと言われています。
この話に従うならば、大屋町の琴
弾峠と若杉峠を経て越部へ来たこと
になります。時代背景を考慮すると
肯定はできませんが、この頃から若
杉峠の往来がうかがえます。

えたと伝えられています。そ
の時、お世話になった人々の
恩に報いるため建てたと言わ
れる、報謝宿供養の碑が現在
も峠口に佇んでいます。

に診てもらつに
も大屋町まで出
てきていたそう
です。
昭和43年に道
幅が広げられて
車の通行が可能
になり、現在は
但馬から国道29

ています。大屋町にとって峠は障害で
はなく、他国との流通をはかると
も身近な道でした。

も、新羅からやってきた天日槍と
大國主命がその土地をどちらが治め
るかで争ったという古い
伝説も残っています。

そのほかにも、公文村(現一
宮町)の庵主さんが大屋町内
に石碑を建てるために峠をた
びたび越えた記録や、修験道
の行場で有名な岡山県の後山に行く
ために、峠を越えたと
伝えられる石碑も残っ
ています。

号線に合流する道路として、利用者
の数も増えました。

若杉地区から宍粟郡波賀町道谷へ
通じる若杉峠も、但馬と播磨を結ぶ
街道であると同時に、併行する地域
の人々の重要な生活道として、その
役割を果たしてきました。

また一方で、峠は地域
の人々にとって信仰の道
でもありました。江戸時
代には若杉
村の庄屋夫
婦が全国巡
礼の行き帰
りの際に、
若杉峠を越

一般の人々にとって、
峠はとも身近な道筋
だったのです。
つい最近まで、波賀
町道谷の人たちは汽車
に乗るのにも、峠を越
えて八鹿駅(養父市)ま
で歩いて来たり、医者

若杉の名のとおり、杉木立の山道
を登っていくと、頂上からは雄大な景
色を望むことができます。
かつての生活道は失われつつあり
ますが、爽やかな空気を吸い込むと
人々の行き交う姿が浮かんできそう
です。

若杉峠の歴史は古く、播磨風土
記に越部(現新宮町)の記述があ
ります。

越部里は安閑天皇の時代、但馬の
君小津が開いた土地とされています
が、一説に但馬の三宅(旧新宮町三

協力：豊岡市史料整理室
参考資料：『大屋町史資料』

国土交通省豊岡河川国道事務所

が、一説に但馬の三宅(旧新宮町三

若杉峠を越

参考資料：『大屋町史資料』

国土交通省豊岡河川国道事務所



お客さまの目線で

お客さまを最優先に

ありがとうの気持ちを込めて

地域とともに発展する